

檜隈寺周辺の調査

—第159次

1 はじめに

本調査は、キトラ古墳周辺に計画された国営歴史公園の整備にともなう発掘調査で、今年度はその2カ年目にあたる。国土交通省の委託を受けて、奈文研、榎原考古学研究所（以下、榎考研）、明日香村教育委員会（以下、明日香村教委）が分担して調査を実施しており、昨年度の試掘調査では、檜隈寺の主要伽藍北側の丘陵頂部や丘陵裾に、寺院に関連する遺構が存在することがあきらかとなった（『紀要2009』、榎考研『奈良県遺跡調査概報2008年』2009）。これらの調査成果をふまえ、今年度は奈文研が主要伽藍北側の丘陵東斜面、および講堂北西の平坦地についての調査を担当することとなった。調査区は、檜隈寺伽藍北東の丘陵東斜面に第1～5区、講堂北西の平坦面に第6区を設けた。調査期間は2009年5月1日から2010年2月8日、調査面積は計1222㎡である。

渡来系の東漢一族の氏寺である檜隈寺は、飛鳥の西南部、檜前の地に造営された古代寺院で、キトラ古墳からは北西約600mの位置にある。奈文研が1979～1982年におこなった第1～4次調査では、瓦積基壇をもつ講堂や金堂、西門といった主要堂宇を確認し、西を正面とする珍しい伽藍配置をとり、伽藍主軸が北で23°～24°西に振れることが判明している（『藤原概報10～13・17・19』）。これらの建物の造営時期は、出土遺物から、金堂・西門が7世紀後半、講堂・塔が7世紀末と考えられている。ただし、出土瓦の中には7世紀前半期のものがあり、前身建物の存在が想定されるが、その時期の遺構は现阶段では見つかっていない。（若杉智宏）

2 各調査区の概要

第1・2区

檜隈寺が所在する丘陵先端東側に設定した調査区で、榎考研4トレンチ（前掲：榎考研2009）の東側、明日香村教委調査区B-3区（明日香村教委『明日香村遺跡調査概報平成19年度』2009）の西側に位置する。調整池設置にともなう調査で、調査面積は第1区が29㎡、第2区が173㎡で調査区間に農業用水路がある。

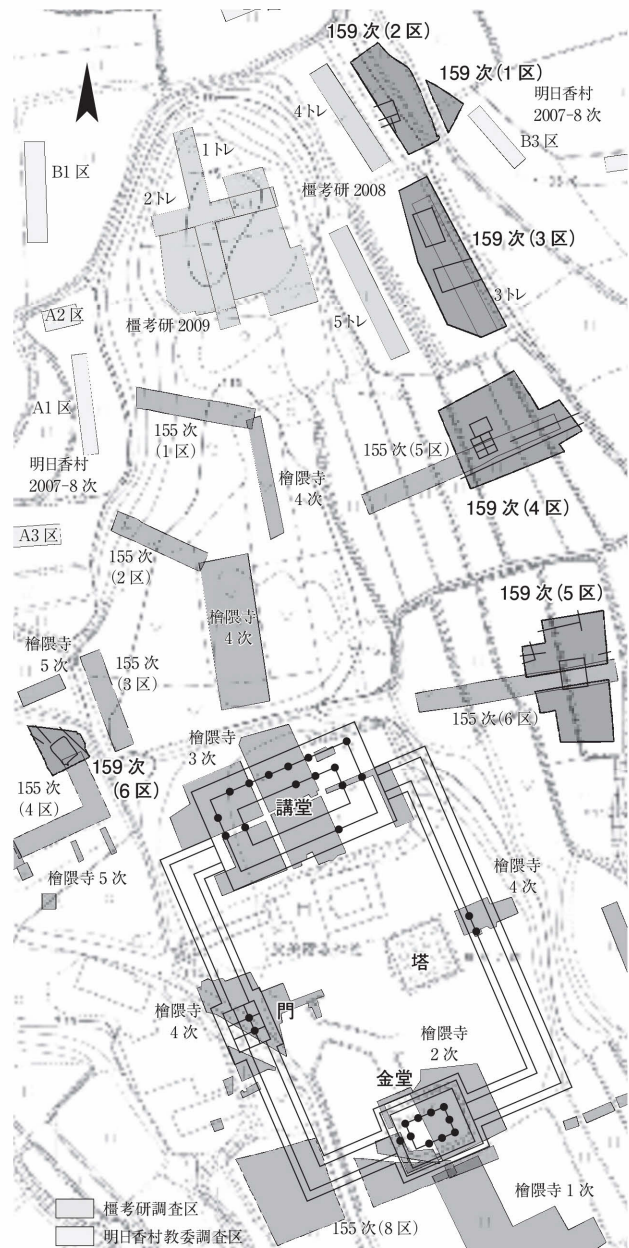


図155 調査区位置図 1:1500

第1区の基本層序は、上から①耕作土（10～15cm）、②床土（20～30cm）、③灰黄褐色砂質土（40cm：整地土）、④褐色粘質土（30cm以上）である。④層からは遺物が出土せず、その上面で検出した遺構もない。③層上面で柱痕跡をとともなう柱穴2基を確認した。柱穴埋土が異なるため、別々の遺構と考えられる。

第2区の基本層序は、上から①表土（10～15cm）、②棚田造成時盛土（15～40cm）、③暗橙褐色粘質土（15cm～20cm：整地土）、④橙褐色粘質土（20～30cm：整地土）、⑤地山である。遺構は③層と④層で検出した。③層上面で

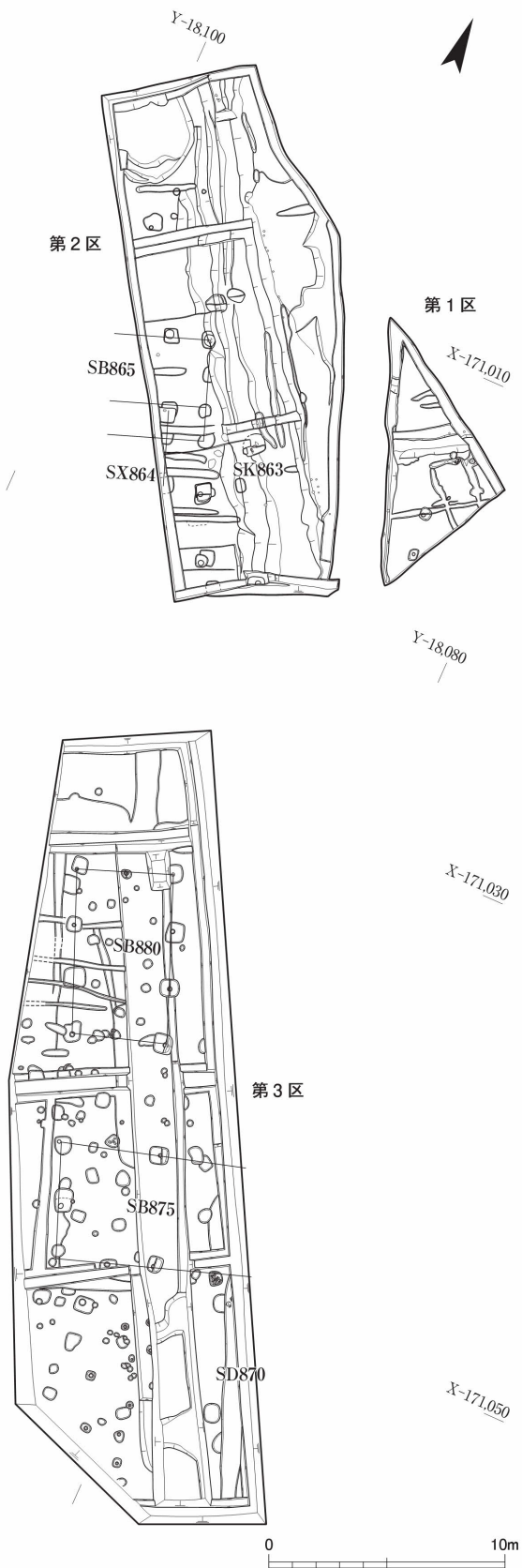


図156 第1～3区遺構図 1:300

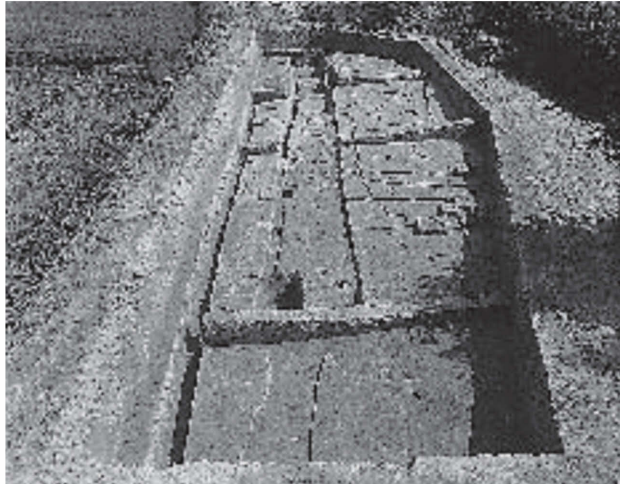


図157 第3区全景(北から)

は、柱穴列と掘立柱建物を確認した。④層上面では南壁で径0.7m、深さ60cm以上の柱穴一基を確認したが、組になる柱穴は調査区外に続くか、棚田造成時に削平されたものと考えられる。

土坑SK863 第2区中央部で検出した径0.8mの土坑。須恵器大甕の口頸部が出土した。

柱穴列SX864 第2区西壁際で検出した、掘方一辺0.6～0.8m、深さ50cmの柱穴2基である。③層を掘り込む。南北に並び、北で約22°西に振れる。調査区外へ続くものと考えられる。

掘立柱建物SB865 第2区中央部西寄りで検出した、南北3間、東西2間以上の東西棟の南面庇付き掘立柱建物。西側調査区外へ続くが、榎考研4トレンチでは検出されていないので、東西4間以下の規模と考えられる。北で約22°西に振れる。③層を掘り込み、一部の柱穴はSX864に壊される。直径20cmの柱痕跡をとまなう。

(黒坂貴裕)

第3区

榎考研3トレンチ全域を含む、南北33.7m、東西9.8mの台形の調査区である。榎考研3トレンチでは、塀ないし建物の可能性がある一辺0.6～0.8mの隅丸方形の柱穴が4基 (SP07・10・17・18)、塀の可能性がある一辺0.3～0.4m程度の柱穴6基 (SP04・05・06・08・11・12) などが検出されており (前掲: 榎考研2009)、本調査区はこれらの遺構の性格と広がりを確認することを目的とする。調査面積は291㎡である。

基本層序は上から、①表土および造成土 (30～50cm)、②旧床土および旧盛土 (80cm)、③にぶい黄褐色細砂土 (20

～30cm：中世以降の遺物包含層）の順である。

③層以下の層は調査区の南と北で異なる。調査区の南半では③層以下に、④灰白色粘質土混じり褐色細砂土（20cm）、⑤にぶい黄燈色細砂土（地山）がある。

調査区の北半では③層以下に、⑥灰黄褐色細砂土（15cm：奈良～平安以降の整地層）、⑦淡黄燈～にぶい褐色細砂土（20～50cm：整地層）、⑧灰色粘質土混じりにぶい褐色細砂土（地山）がある。⑥層は調査区東北約4分の1にのみ確認できる。昨年度の調査所見との対応は、③層が榎考研3層、⑦層が4層、④層がにぶい黄褐色粘質土にあたる。

遺構検出は③・④・⑦層の上面でおこなった。③層では、小溝や径0.2～0.5mの穴を30基程度検出したが、顕著な遺構は確認できなかった。以下では、④・⑦層で検出した遺構について述べる。

検出した主な遺構は掘立柱建物、素掘溝、土坑である。掘立柱建物SB875 南北2間、東西3間以上の東西棟。昨年度の調査で検出された隅丸方形の柱穴2基（SP17・18）は南北の側柱となる。ただし、一部において柱穴が不明瞭で、柱の通りも悪く、課題を残す。柱間は東西2.1m（7尺）、南北2.1～2.7m（7～9尺）で等間ではない。南側の柱筋は東で21°北に振れる。建物方位や柱痕跡の特徴がSB880と一致し、同時期のものと考えられる。

掘立柱建物SB880 東西2間、南北3間の南北棟。⑦層上面で検出。昨年度の調査で確認された隅丸方形の2基の柱穴（SP07・10）は、東側柱となる。柱間は東西2.1m（7尺）、南北2.4m（8尺）。いくつかの柱穴で柱痕跡を確認しており、その直径は15～20cmを測る。柱掘方は、南北両妻が径0.4m程度と側柱に比べて小さいが、昨年度の調査で検出された北妻の柱穴では約15cmの柱痕跡が確認されており、柱の太さは、側柱と大差なかったとみられる。建物の方位は、北で22°西に振れる。

南北溝SD870 調査区の東南部にある幅0.8m、深さ20cmの素掘溝。④層上面で検出した。埋土は単層で流水の痕跡は認められず、埋め戻されたか、短期間で埋没が考えられる。埋土からは飛鳥Ⅱの土器、格子目叩きの瓦などが出土している。

なお、昨年度の調査で、堀の可能性が想定されていた柱穴列（SP04・05・06・08・11・12）については、その続きを確認できなかった。（加藤雅士／愛知県埋蔵文化財センター）

第4区

講堂の北東約80mの丘陵東斜面に設定した調査区で、第155次調査（以下、155次）第5区で検出した掘立柱建物SB800、掘立柱堀SA795、SA805の規模およびその周辺の遺構の状況を確認することを目的とする。調査面積は364㎡である。

基本層序は上から①耕作土（10～40cm）、②にぶい黄褐色砂質土～灰黄褐色砂質土（10～70cm：中世以降の遺物包含層）、③明褐色砂質土（10～30cm：整地層）、④明黄褐色粘質土～黄燈色砂質土（10～25cm：整地層）、⑤黄褐色砂質土～浅黄燈色砂質土（10～50cm以上：整地層）、⑥地山である。③・④層は出土遺物より、7世紀前半～中頃以降の整地層と考える。地山は東へ向けて落ちる斜面をなし、南北方向はほぼ平坦であるが、北がやや低い。遺構検出は③・④・⑤層の上面でおこなった。

検出した主な遺構は、掘立柱建物、掘立柱堀、素掘溝、土坑である。

掘立柱建物SB800 調査区中央西側で検出した総柱建物。⑤層を掘り込む。155次で東西2間、南北2間分を確認していたが、今回さらに北側に1間分を確認し、建物の大きさは東西2間、南北3間であることが判明した。柱掘方は0.8m四方、深さは50～70cm。柱間は東西2.1m（7尺）、南北1.5m（5尺）で、南北方向の柱筋は北で25°西に振れる。

掘立柱建物SB888 SB800の北側で検出した掘立柱建物。⑤層を掘り込む。東西2間、南北2間で、柱掘方は0.4×0.5m、深さ45cm。ただし、西北・東北の隅柱は他の柱穴より若干大きい。いずれの掘方にも直径10～15cmの柱痕跡が残る。柱間は東西1.8～2.1m（6～7尺）、南北1.2～1.5m（4～5尺）で等間にはならない。SB800と位置が一部重なるが、柱穴の重複がないため、両者の前後関係は不明である。

掘立柱堀SA795 SB800の東から延びる掘立柱堀。⑤層を掘り込む。155次で確認していたが、今回の調査で新たに東2間分を検出し、合わせて7間分を確認した。さらに調査区外へ東に続くと考えられる。柱掘方は一辺0.6～0.9m、深さ60cm。柱筋の方向は東で22°北に振れる。

掘立柱堀SA885 SB800の南側で検出した、東西方向の掘立柱堀。⑤層を掘り込む。11間分を確認したが、さらに調査区外へ延びると考えられる。柱掘方は一辺0.5～

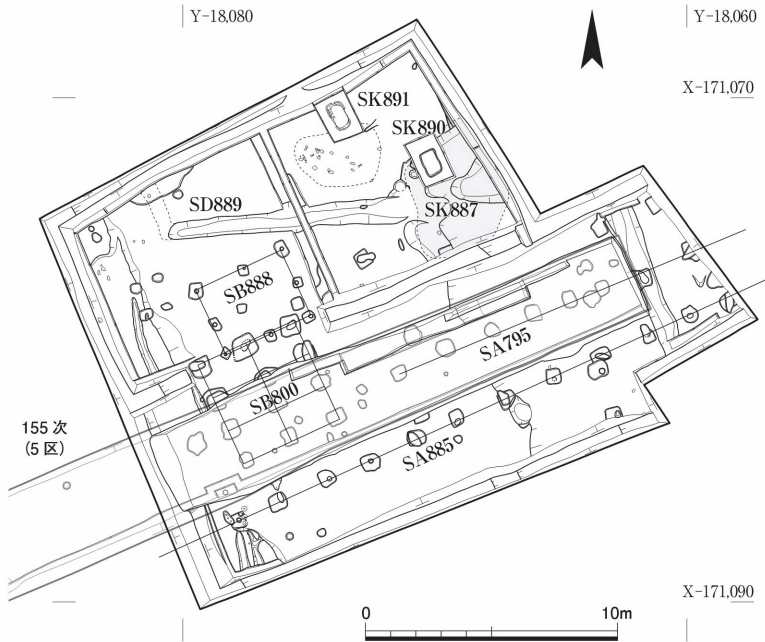


図158 第4区遺構図 1:300

0.8m、深さ50cm。一部の柱穴には直径15～20cmの柱痕跡が残る。柱筋の方向はSB800の東西柱筋とそろい、同時期の遺構と考えられる。

東西溝SD889 調査区北側で検出したL字状の素掘溝。④層を掘り込む。幅1.3m、深さ20cmで、埋土より飛鳥Ⅰの土器が出土した。重複関係から、SK887より古い。
大土坑SK887 SK890の南東で確認した大土坑。④層を掘り込む。SK890と位置が一部重複し、SK890より古い。大きさは東西1.4m以上、南北1.8m以上。埋土は多くの炭を含み、飛鳥Ⅰの土器が出土した。

焼成土坑SK890 中世の遺物包含層の直下、③層上面で検出した土坑。長方形をなし、大きさは0.65×1mで、深さは30cm。土坑底部には一面に炭が堆積し、壁面は

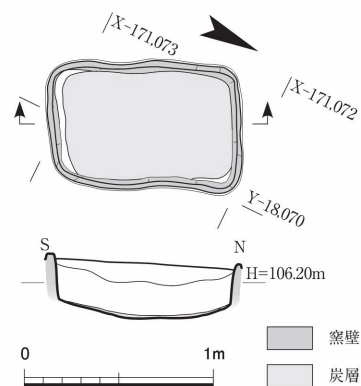


図160 SK890平面図・断面図 1:40

被熱により硬化するが、床面は赤色焼土化していない。土坑内部から出土した遺物は少なく、いずれも細片で、性格は確定し難いが、炭以外の遺物がほとんど存在せず、床面全体に炭層が確認できるこ



図159 SA795・SA885検出状況(東から)

とから、製炭土坑と考える。

焼成土坑SK891 SK890の北西で検出した土坑。③層上面で検出した。大きさは0.7×1.15m、深さは30cm。底部ほぼ全面に残る炭層や焼けて硬化した壁面など、構造はSK890と同じである。床面は赤色焼土化していない。内部からはほとんど遺物が出土しておらず、SK890と同様、製炭土坑であったと考えられる。また、調査区南側でも、中世包含層直下で、炭や窯体片、鞆羽口片などを含む土坑を確認しており、SK890・891と同時期のものとみられる。

なお、155次で2基の柱穴を検出したSA805については、北側に続く柱穴が確認できず、再検討の結果、2基とも土坑と判断した。

第5区

講堂の東約60mの地点に設定した調査区で、155次第6区で検出した柱穴列SA806、柱穴SX807の規模・性格と周辺の遺構の状況を確認することを目的とする。調査区は155次第6区をはさみ南北に分かれ、調査面積は計295㎡。また調査区は、南北に走る棚田の段により上下二段に分かれる。

基本層序は上から①耕作土(10～30cm)、②にぶい黄褐色砂質土(5～80cm:中世以降の遺物包含層)、③褐色粘質土～明黄褐色砂質土(10～70cm以上:整地層)、④地山

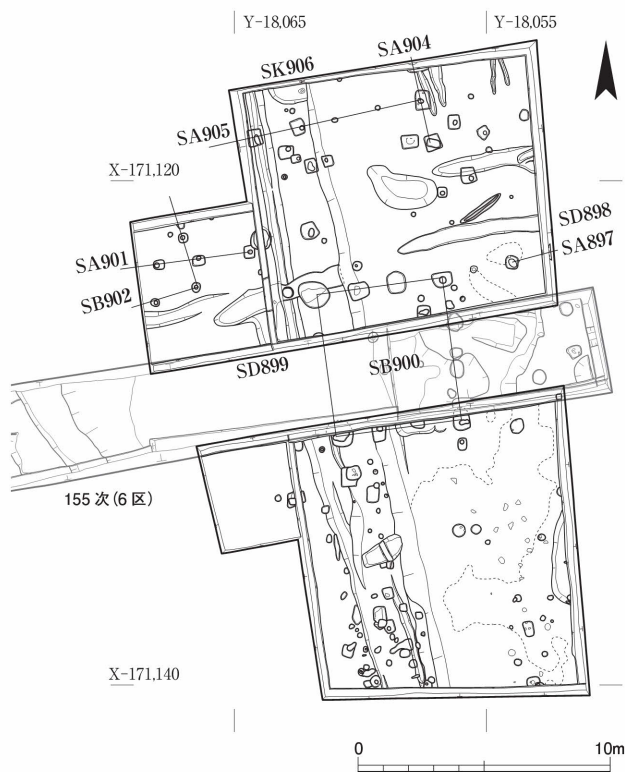


図161 第5区遺構図 1:300

である。③層は調査区の東側4分の1ほどにしか残存しておらず、調査区東北部がもっとも厚い。調査区全体の約4分の3は②層を除去すると地山が露出する。地山は南および西が高く、全体として北東方向に向かい落ち込んでいる。調査区東北隅では、地表より1.4m下でも地山は検出できなかった。いずれの遺構も、③層および④層上面で検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物、掘立柱塀、素掘溝、土坑である。

掘立柱建物SB900 調査区中央で確認した掘立柱建物。東西3間、南北3間で、155次第6区で検出した柱穴列を東側柱列とし、SX807は西南隅柱となる。東半部は棚田造成などによる削平が大きく、柱掘方の残存は浅い。柱掘方は西北隅柱で1.1m四方、深さ90cm。柱間は等間にならず、東西1.65～1.8m(5.5～6尺)、南北1.8～2.1m(6～7尺)。南北の柱筋方向は北で8°西に振れる。

掘立柱建物SB902 調査区西張出部の西北端で確認した。東西1間、南北1間分を検出し、建物の東南隅と考えられる。柱掘方は円形～隅丸方形で0.35×0.4m、深さは15cm。各柱穴には直径15cmほどの柱痕跡が確認できる。柱間は東西1.8m(6尺)、南北2.1m(7尺)。SA901と位置が重なるが、柱穴の重複がないため、両者の前後関係は不明である。

掘立柱塀SA897 SB900の東側で検出した東西塀。調査

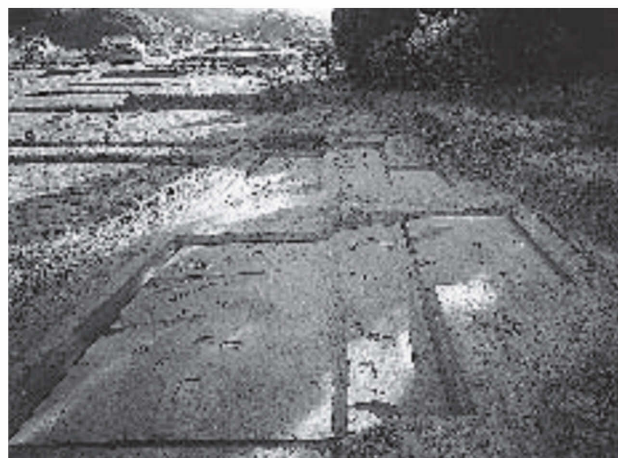


図162 第5区全景(北から)

区では1間分を確認したのみで、さらに東へ続くと考えられる。柱掘方は隅丸方形で0.5m四方、深さは35cm。

掘立柱塀SA901 SB902と重複する位置で検出した東西塀。2間分を確認し、さらに西へ続くと考えられる。柱掘方は隅丸方形で0.4×0.5m、深さ35cm。各柱穴には直径20cmほどの柱痕跡が残る。柱間は1.8～2.1m(6～7尺)。

柱筋の方向がSB900と揃い、同時期のものと考えられる。**掘立柱塀SA904** 調査区東北部で検出した南北塀で、2間分を確認した。柱掘方は隅丸方形で0.6×0.7m、深さは50cm。柱間は1.8m(6尺)である。SA905にほぼ直角に取り付きT字状をなす。

掘立柱塀SA905 調査区北側で検出した東西塀。SA904にほぼ直角に取り付く。4間分を確認したが、東寄りの柱2本分は大きく削平を受けており、柱痕跡のみの検出である。柱掘方は隅丸方形で0.55×0.6m、深さ50cm。柱痕跡の直径は約15～20cmで、柱間は1.5～1.8m(5～6尺)。柱筋の方向は、東で13°北に振る。

東西溝SD898 調査区中央やや北寄りで検出した東西方向の素掘溝。棚田の段造成により途中約2.5mが分断されており、東側部分は削平により西側より浅い。幅は0.6～1m、深さは西側部分で45cm。埋土より飛鳥Iの土器が出土している。重複関係からSB900より古い。

南北溝SD899 SD898にほぼ直角に取り付く南北方向の素掘溝。幅0.85m、深さ15cmで、SD898より浅い。

土坑SK906 調査区西北で検出した中世の土坑。東西1.5m以上、南北0.9m以上で、大量の瓦器・土師器皿などが出土した。(若杉)

第6区

檜隈寺講堂北西約25mの地点に設定した調査区で、155次第4区で検出した石組遺構SX790の全容をあきらかにすることを目的とする。調査面積は70㎡。

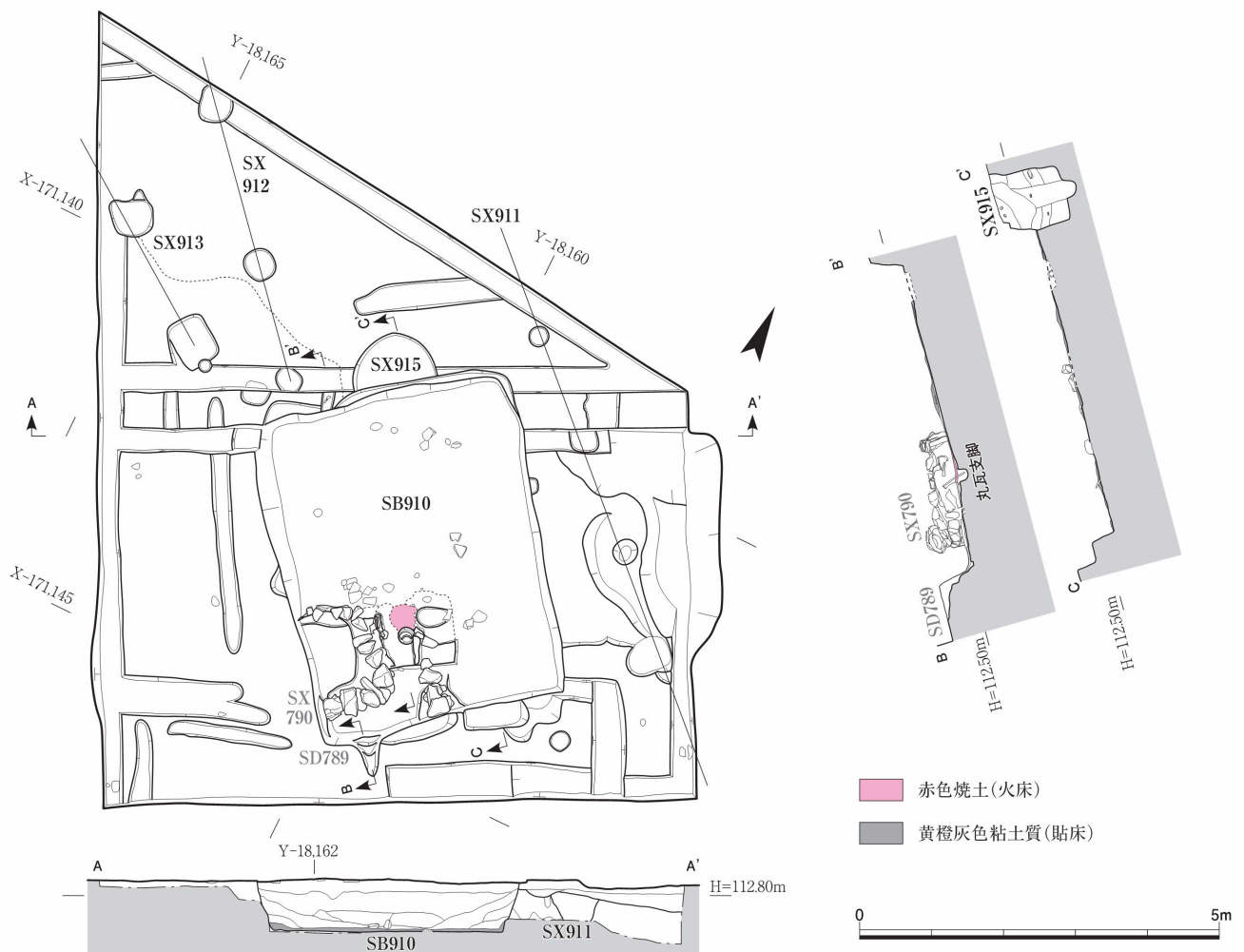


図163 第6区遺構図 1 : 100

基本層序は上から①表土 (10～25cm)、②耕作土 (5～20cm)、③暗橙褐色粘質土 (5～40cm：整地土)、④橙褐色粘質土 (40cm以上：整地土)、⑤地山である。ただし、調査区西南半では整地土が削平されており、地山上で遺構を確認した。調査区東北半は谷地形の一部で、東へ下る地山の落ち込みを整地土③・④層で平坦に造成する。検出した遺構は、竪穴建物、柱穴列、柱穴である。

竪穴建物SB910 石組のL字形カマドをもつ竪穴建物である。長辺4.8m、短辺3.5mの長方形平面で、長辺は北で約40°西に振れる。西南側で地山を掘り込み、東北側で③層を掘り込んでいる。竪穴の壁の立ち上がりは約70cm残存している。竪穴外周の周堤・周溝は検出されず、竪穴内の施設の状況から見ても、壁の立ち上がりは70cm以上であったと考えられる。竪穴底面では柱穴および壁際溝は検出されず、貼床2面を確認した。当初の貼床はカマド周辺で炭・灰が混じる粘土で、これを覆う黄橙灰色粘質土面は改修後の貼床と推定される。南壁東半には、カマドと並ぶように柵状施設が確認できた。幅約0.9m、竪穴底面からの高さ約35cm、奥行約25cmである。素掘り

で地山を削出している

カマドは竪穴内西南隅に約2m四方の大きさで設けられていた。155次石組遺構SX790はカマドの一部である。カマドの構造は、焚口を北面させ、煙道は底面を徐々に高くしながら南壁に向かったのちに、西へ折れ曲がって西壁に至る。西壁に向かう煙道の中ほどから、浅い溝が竪穴外南に延びる。この浅い溝は昨年度の調査でSD789と報告し、SX790との取り付け部には平瓦が貼り付いていたことが確認されている。この平瓦も含め、SD789は、カマドの煙出しと推定される。

カマドの西壁体石組は高さ約50cmで最大3段が残存し、コの字状に総延長3m並び、柵状に地山を掘り残した部分を取り囲む。東壁体石組の基底部分でも地山を掘り残した盛り上がりを確認した。東壁体石組は高さ約40cmで南壁際に3段が残存し、総延長1.1mで南北に直線状に並ぶが、焚口側では石組が壊されており、抜取穴を確認した。抜取穴を含めると、東壁体石組の並びは焚口側でやや東に円弧を描いており、西壁体石組も西に円弧を描いて並ぶ。したがって石組は焚口に向けて広がる平面

形を呈する。

焚口では丸瓦を立位で検出した。丸瓦の据付掘方は焼土によって覆われるが、丸瓦自体が焼け焦げた様子は無い。カマドの支脚と考えられるが、使用状況は不明である。壁体石組には焼け焦げた粘土が貼り付いているので、カマドは石組を構築材とし、粘土で覆っていたものと考えられる。カマドの天井は壊されており、その構造は不明である。

カマドは2度の改修を受けていることが判明した。カマドの当初形は石組の並びに沿った広い焚口をもつものであったと考えられる。1度目の改修は、当初のカマド底面焼土を残したまま、西壁体の燃焼部内壁に粘土を貼る。2度目の改修では、西壁体の燃焼部内壁に瓦片・焼土混じりの粘土を厚く貼り付けて焚口の幅を東に狭め、丸瓦支脚を据え付ける。これによって、最終段階の焚口火床と推定される赤色焼土の広がりや丸瓦支脚の中軸線は、煙道中軸線から東にずれる。これらのカマド改修では貼床の改修もともなった可能性がある。

建物の時期は、出土遺物から7世紀前半～中頃とみられる。

柱穴列SX911 調査区東寄りです3間分を確認した。柱間は約1.5m(5尺)、柱筋は北で約45°西に振れる。掘方は最大0.6m、深さ60cm。④層を掘り込む。ただし、一部の柱穴では直径約20cmの柱痕跡が③層上面で確認できる。

柱穴列SX912 調査区北寄りです2間分を確認したが、柱間寸法は一定しない。北で約40°西に振れる。掘方は最大で0.5m、深さ40cm、柱痕跡の直径は最大で20cmで、ともに③層上面で検出した。

柱穴列SX913 調査区西北寄りです1間分を確認した。柱間は約1.8m(6尺)、柱筋は北で約50°西に振れる。掘方は最大で0.6m、深さ35cm、柱痕跡の直径は約20cmである。また、掘方に付随するように直径約15cmの浅い小穴を検出したが、掘方に対する位置が一定せず性格は不明である。③層上面で検出した。

柱穴SX915 調査区内です1基のみ検出した柱穴である。掘方南辺の一部と柱の抜き取り痕跡を竪穴建物SB910に壊される。掘方は最大で約1.1m、深さは約1mである。柱痕跡の直径は約25cmで、深さは約1.2mで、柱位置だけ掘方底面から沈み込むように深くなる。③層上面で検出した。(黒坂)

3 出土遺物

石製品 主なものとして、切子玉、白玉、紡錘車が各1点出土した。切子玉は水晶製。14面体で片面穿孔である。第2区出土。白玉は滑石製で直径0.4cm、厚さ0.2cm。第6区出土。紡錘車は滑石製で鋸歯文と平行線が刻まれる。第4区出土。

鍛冶関連遺物 整理用小コンテナで20箱程度出土した。鉄滓、羽口、窯体、焼土、焼礫、炭などの破片がみられる。第4区および第6区より出土したものが大半を占める。この他、ガラス滓や青銅付着の瓦片が出土した。

(木村理恵)

動物遺存体 第6区SB910のカマド焚口焼土から、スズキ属の前上顎骨が検出できた。骨は焼けて白色化している。

(山崎 健)

土器 各調査区から整理木箱計52箱分の土器が出土した。古代の土師器・須恵器が多くを占め、他に中世の瓦器・土師器、古墳時代の須恵器などがある。遺構にともなうものは多くないが、ここでは比較的まとまった出土をみせた第3区SD870、第4区SK887、および第6区SB910出土土器について報告する。

第3区SD870からは、土師器杯G・杯H・高杯C・皿・甕、須恵器杯H・鉢・甕などが出土している(図164)。9は土師器皿。底部から口縁部は丸みをもって立ち上がり、その境が明瞭でない。14・15は須恵器杯G蓋。口径、かえりの形状、胎土などに差異がみられる。15は外面全体に自然釉が降着する。17・18は須恵器平瓶。17は完形で、口縁部ほぼ中央に弱い沈線がめぐる。調整はロクロナデで、ケズリは施さない。肩部にT字状のヘラ記号をもつ。18はやや内湾する口縁を有し、体部下半～底部に手持ちケズリを施す。20は須恵器鉢。体部下半に手持ちケズリを施し、外面中央には沈線がめぐる。黄灰色を呈する。これらの土器群は飛鳥Ⅱの特徴をもつ。

第4区SK887出土土器には土師器杯H・高杯C・高杯H・鉢H・椀・壺、須恵器杯H・杯G・高杯・甕などがある(図164)。

1～5は土師器杯H。いずれも口縁部をヨコナデし、底部にヘラケズリを施すが、器高や口縁部の開き、ケズリの範囲などに差がみられ、形状は多様である。6は土師器杯X。口縁部は鐙状に開き、底部にはヘラケズリを

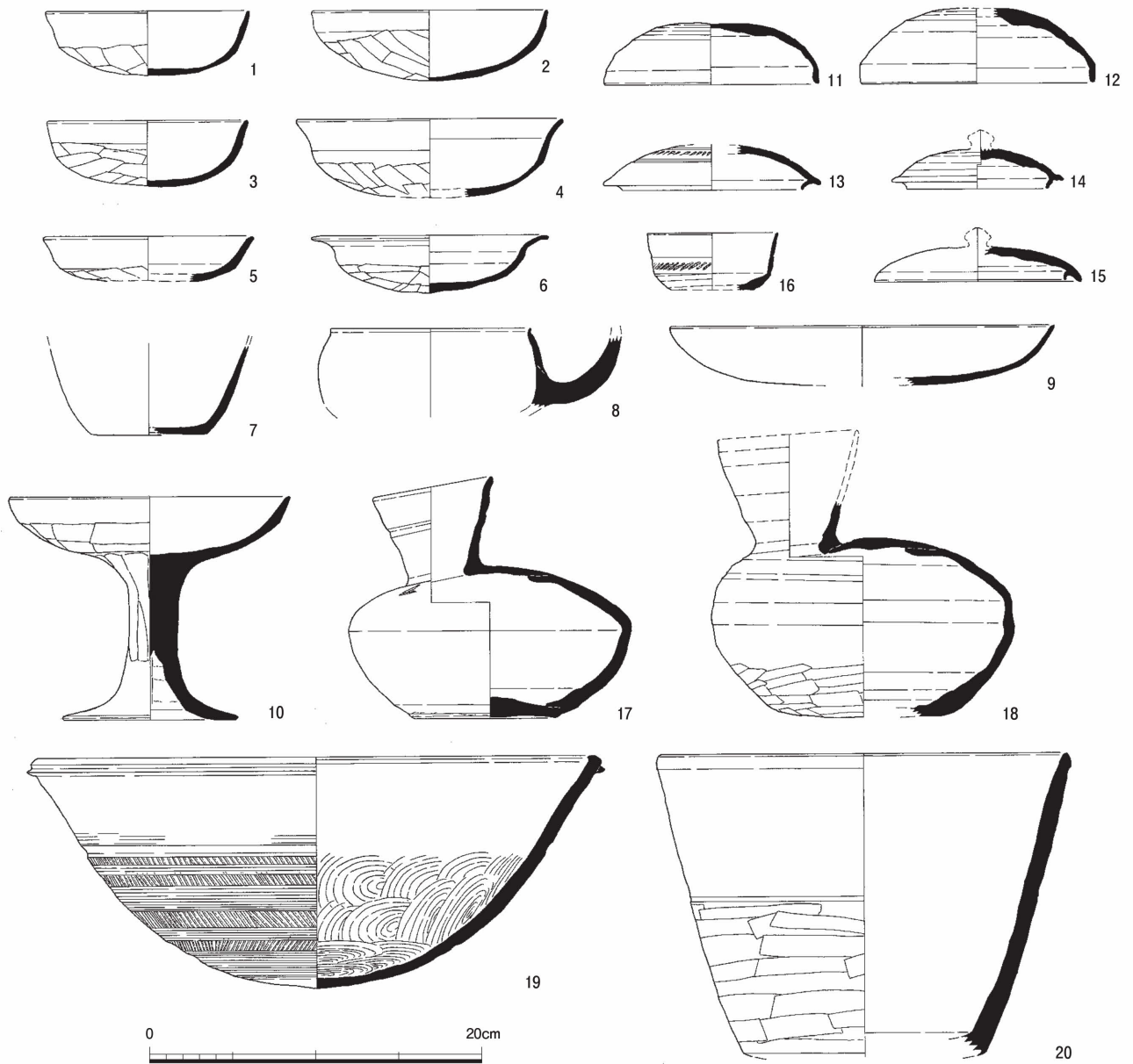


図164 SD870・SK887出土土器 1:4

施す。7・8は土師器碗。7は平底で体部は直線的に立ち上がる。8は体部がやや内湾し、把手が付く。10は土師器高杯H。磨滅により調整は不明瞭だが、脚部および杯底部をヘラケズリする。11・12は須恵器杯H蓋。口径は、11が12.9cm、12が14.0cmで、両者とも頂部にはロクロケズリを施す。12は焼成が軟質で黄白色を呈す。13は須恵器杯G蓋。頂部に2条の沈線を入れ、その間にキザミ目文を施す。16は須恵器杯G。口径は7.8cmと小さい。体部下半～底部に丁寧なロクロケズリを施し、非常に平滑。体部中央に列点文をもつ。19は須恵器鉢。外開きの口縁部と丸底の底部をもつ。口縁端部直下に小突帯がめ

ぐる。底部～体部下半にタタキを施し、その後底部～口縁部にカキメを施す。体部中央には沈線がめぐる。白～灰白色を呈する。

これらの土器群は、飛鳥Iの特徴を示す。また、器種構成の特徴として、土師器杯Hが多く、杯C・杯Gが少ないという傾向がみられる。この特徴は、各調査区出土の古代の土師器杯類についても指摘できる。(若杉)

第6区SB910出土の土器には土師器杯C・杯H・甕、須恵器杯H・杯G・甕などがある(図165)。各土器はSB910の埋土(1・3・6)、焚口焼土中(2・5)、床面直上(4)から出土した。

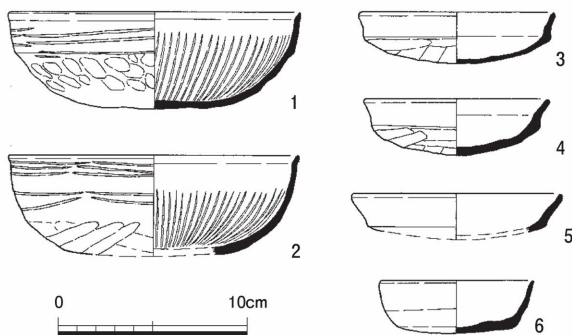


図165 SB910出土土器 1:4

1・2は土師器杯C I。1は完形で、口縁部をヨコナデ調整し、外面に粗いヘラミガキを施す。径高指数は32.8。2の底部はヘラケズリ調整である。3～5は土師器杯H。3・4は完形である。いずれも口縁部を強くヨコナデし、底部にヘラケズリを施す。6は完形の須恵器杯G。焼成が軟質で黄褐色を呈し、底部外面はヘラ切り不調整である。これらは飛鳥Ⅱの特徴を示す。

また、第6区では、以上の土器の他に、5世紀代の須恵器片が含まれており、調査地周辺における当該期の土地利用の存在を示唆する。(小田裕樹)

瓦類 瓦類としては、軒丸瓦2型式5種11点、軒平瓦2型式3種7点、垂木先瓦1型式1点、隅切平瓦1点、土管1点、鬘斗瓦2点、磚3点、ヘラ描丸・平瓦7点、丸瓦1007点(105.08kg)、平瓦7872点(414.07kg)が出土した。瓦類は各調査区全体に分布するが、多くは包含層からの出土であり、調査区ごとの出土量に大きな差はない。ここでは、まず出土した軒瓦の概要を記し、次に第6区SB910から出土した瓦についてまとめる。SB910からは、一定量の瓦が出土し、丸・平瓦の型式もまとまっている。なお、ローマ数字による型式名は、檜隈寺出土軒瓦の型式名である(花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集Ⅺ』奈文研、2000)。

軒瓦(図166)については、これまでの調査で確認された7世紀後半以降に造営された講堂・塔の所用瓦である軒丸瓦Ⅲ型式A(6275G:1)と軒平瓦Ⅲ型式A(6641L:2)の出土がやや目立つ。1の焼成は良好で硬質。胎土に長石、石英をやや多く含む。色調は灰色。第2区出土。今回、これまで檜隈寺で出土したⅢ型式Aを再検討した結果、いくつかの資料において、瓦当裏面に布目が残りに、その上にさらに厚さ0.5～1cm程の粘土を貼り付けている痕跡を確認できた。すなわち、Ⅲ型式Aが布目押圧技



図166 第159次調査出土瓦類 1:4

法Ⅰ類a種(毛利光俊彦「布目押圧技法の展開」『平城報告ⅩⅢ』)により製作されたことがあきらかとなった。

2の焼成は良好で硬質。1と同様に、胎土に長石、石英をやや多く含む。色調は灰色。断面において、瓦当下面下外区的位置から顎の段にかけて粘土板の接合面が確認でき、粘土板を貼り付けて顎部を成形したことがわかる。

3は軒丸瓦Ⅰ型式B。蓮弁は八弁で、弁に複子葉と火炎文を加える。焼成は良好で、やや硬質。胎土に石英や長石、黒色のクサリ礫が含まれる。SB910の埋土から出土。この型式は、これまでの発掘調査でも出土しているが、所用堂塔はあきらかではない。ただ、有子葉単弁八弁という型式や、7世紀後半以降に造営された堂塔の所用瓦との比較からは、すでに指摘されているように(『藤原概報13』)、7世紀後半以降に造営された主要伽藍に先行する前身遺構にともなう可能性が高い。

4は、素弁八弁蓮華文軒丸瓦。外縁と中房を欠失しており、瓦当紋様の全容を把握できない。外縁部は意図的に打ち欠かれた可能性もある。蓮弁は短小で肉厚、あまり開かない。弁中央に鑄を有し、弁端は反転する。間弁はくさび状で大型、中央に鑄を有する。蓮弁と間弁の外側におそらく凹線が廻る。瓦当裏面のほぼ全面には格子叩きが確認され、その一部が円弧状にナデ消されている。

瓦当裏面を格子叩きで成形した後に丸瓦を接合し、その接合部を円弧状にナデ調整したという順序が考えられる。焼成は良好であるが、やや軟質。長石や石英、黒色のクサリ礫を多く含む。色調は表面が茶灰色、芯は橙褐色である。SB910の埋土からの出土で、これまでの檜隈寺の調査においてはほとんど確認されていない型式である。ただし、同範の可能性のある資料が、檜隈寺第3次調査で1点出土している（『藤原概報12』）。この資料は素文縁で内区周囲に凹線が廻る。

5は単弁八弁蓮華文の垂木先瓦。山田寺式垂木先瓦Aと同範の可能性が高い。焼成は良好で硬質。胎土に長石、石英を多く含む。第4区出土。

SB910内からは、上述の軒丸瓦3・4、カマドの支脚に転用された丸瓦、カマドの壁体補修に用いられた平瓦などが出土し、埋土内からも平瓦を中心に多くの瓦が出土した。整理用コンテナ3箱分ほど確認できる。出土した丸・平瓦はいずれも粘土板技法で製作され、凸面全面に格子叩きが施される。丸瓦の場合、凸面の格子叩きをナデ消すが、叩きの痕跡が一部残る。広端面に藁座痕跡を残すものもある。そして、軟質で色調が橙褐色、あるいは表面が茶灰色で芯が橙褐色を呈する資料が多い点も特徴的である。

7世紀後半以降の檜隈寺所用の丸・平瓦は、凸面に縄叩きが施されるが、SB910内からは凸面縄叩きの資料は出土せず、第4次調査で確認された東回廊基壇下の整地層出土の丸・平瓦（前身遺構にともなう瓦と推定。『藤原概報13』）と叩きや色調、法量などが一致する。

以上のような丸・平瓦の特徴や軒丸瓦3・4を考慮すると、SB910内出土の瓦は、前身遺構にともなう瓦であった可能性は高い。また、それらの瓦の中には、凸面縄叩きのものが含まれないことから、檜隈寺に凸面縄叩きの瓦が葺かれた7世紀後半には、SB910は埋め立てられていたと考えられる。おそらく、7世紀後半以降の主要伽藍造営時の大規模な土地造成の際に、SB910も埋め立てられ、その埋土に前身遺構にともなう瓦が含まれていたであろう。（高田貴太）

4 まとめ

今回の調査成果は大きく以下の2点にまとめられる。

①講堂北西の第6区では、石組のL字形カマドをもつ

竪穴住居SB910を検出した。SB910は、出土遺物から7世紀前半～中頃のものとして判断でき、L字形カマドのうち、石組のものとしては国内最古の例となる。また、L字形カマドは渡来系の技術と考えられており、渡来系氏族の氏寺である檜隈寺の特徴をさらに際立たせる遺構といえる。檜隈寺では、出土遺物から7世紀前半の前身伽藍の存在が想定されていたが、これまで周辺では、その時期の遺構は確認できていなかった。今回検出したSB910は、主要伽藍造営以前の檜隈寺の様相を解明する上でも、重要な遺構である。

②第1～5区では、丘陵東裾に展開する掘立柱建物や掘立柱塀を検出した。建物の方角は、第3区SB880では北で21°～22°西に、第4区SB800では北で25°西に振れており、北で23°～24°西に振れる檜隈寺の伽藍方位とほぼ一致するようにみえる。ただし、これらの建物は南北に延びる丘陵斜面の方向ともほぼ平行しており、また第5区SB900の建物方位は北で8°西に振れるもので、檜隈寺の伽藍主軸とは大きく異なることから、地形の制約を受け、それに合わせた建物配置がなされていた可能性も考慮すべきである。

これらの遺構は、上層を覆う包含層の出土遺物から、古代の建物であると考えられるが、建物造営にともなう整地土や柱穴からの出土遺物は少なく、細かな時期の絞り込みは困難である。しかし、主要伽藍の規模を考慮すると檜隈寺の寺域が丘陵頂部にのみ収まるとは考えにくく、丘陵裾部に展開するこれらの建物や塀も檜隈寺の関連施設である可能性は極めて高い。

なお、昨年度の調査では、丘陵裾を取り巻く柱穴列について寺域を限る施設である可能性を想定したが、今回の調査で、第3区SB875や第4区SA795、SA885が調査区外の東側へも続いていく状況が確認でき、檜隈寺の寺域がさらに東へ拡大することが判明した。

また分担して調査をおこなっている檀考研や明日香村教委の調査では、丘陵頂部や西裾でも寺院に関連する建物や遺物が確認されており（檀考研『奈良県遺跡調査概報2009年度』2010、明日香村教委『明日香村遺跡調査概報平成20年度』2010）、丘陵全体を寺院地として利用していたことが確実となった。今後の調査によって、檜隈寺伽藍の全容、および7世紀前半に想定される前身遺構の状況について、さらに解明を進めていきたい。（若杉）